

2017年1月28日(土) 第4回小美玉「聖書で読み解く映画カフェ」上映作品

「雨に唄えば」の見どころ

Singin' in the rain 1952年製作 アメリカ映画 102分

●アメリカのポピュラーソングおよびそれを主題歌にした1952年アメリカ公開のミュージカル映画。日本は1953年(昭和28年)4月公開。1984年6月(CIC)、2000年11月(ヘラルド)の2度の再公開。

●1950年代ミュージカル映画は舞台演目がオリジナルなものがほとんどだが、「雨に唄えば」は映画オリジナル脚本で製作された珍しいケースの作品。公開からおおよそ30年後の1982年、初めて本作のステージミュージカルが公演され、日本でも、2014年11月、東京渋谷文化村のシアターオーブで初公演。

●アメリカ映画協会(AFI)が発表したミュージカル映画ベストの第1位、アメリカ映画主題歌ベスト100の第3位、アメリカ映画ベスト100の第10位、情熱的な映画ベスト100の第16位に選出された。

●歌曲:

アーサー・フリード作詞、ナシオ・ハーブ・ブラウン(英語版)作曲によるポピュラーソング。

1929年公開のMGM作品「ハリウッド・レビュー」で用いられ、「ウクレレ・アイク」ことクリフ・エドワーズが歌って以来、スタンダード・ナンバーとなった。

また「ザッツ・エンターテインメント」の冒頭でこの曲が紹介されるなど、作詞者フリードが後にMGMミュージカルの名プロデューサーとして名をはせたこともあり、同社のミュージカル作品を象徴する曲としても知られる。

デパートなどでは、外で雨が降り出したことを店内に知らせるため、BGMとして用いられている場合がある。

スタッフ・キャスト

監督

ジーン・ケリー

スタンリー・ドーネン

脚本

アドルフ・グリーン

ベティ・カムデン

原作

アドルフ・グリーン

ベティ・カムデン

製作

アーサー・フリード

音楽

ナシオ・ハーブ・ブラウン

衣装: ウォーター・プランケット。1920年代後半の洋服を精巧に再現した衣装をおおよそ500着制作。かの「風と共に去りぬ」も彼の作品。

《出演者》

ドン: ジーン・ケリー

キャシー: デビー・レノルズ(2016.12.29死去。84歳)

コズモ: ドナルド・オーコナー

リナ・ラモント: ジーン・ヘイゲン

ドン・ダンスパートナー: シド・チャリッシ

ゼルダ: リタ・モレノ

あらすじ

サイレント映画全盛の時代、俳優ドン(ジーン・ケリー)と大女優リナ・ラモント(ジーン・ヘイゲン)はドル箱の映画スターであり、大スター同士のカップルともてはやされていた。

しかし実際は、リナが一方向的にドンに惚れているだけであった。そんな中、ドンは駆け出しの女優キャシー(デビー・レノルズ)と恋仲になってしまう。

やがて世界初のトーキー「ジャズ・シンガー」が大成功を収めたことにより、ハリウッドにトーキーの波が押し寄せる。

そこで彼らの映画会社では、当時作りかけだったドン&リナのサイレント映画を無理矢理トーキーにすることに決定。しかしながら、トーキーのノウハウを知らなかったことに加え、一番の問題はリナが致命的な悪声の持ち主であったために、映画の試写会は散々な結果に終わる。そんな映画を公開したら俳優人生が崩壊してしまうと危機を感じたドンとその親友コズモ(ドナルド・オーコナー)、キャシーの三人は映画をミュージカルに作り替えることを思い立つ。あとはリナの声をどうするのが問題だったが、コズモのアイデアでキャシーがセリフも歌も全て吹き替えることになる。こうして撮り直しは順調に進むが、吹替を知ったリナは、怒りと嫉妬から契約を盾にキャシーを自分の吹替専門担当にして表に出られないようにしてしまう。

映画の完成披露試写会が開かれ、ドンとリナの歌声は観客から喝采を受ける。すると調子に乗ったリナが自らの声でスピーチをしてしまう。声が違うことを怪しんだ観客から、リナが生で歌うように迫られると、ドンと映画会社社長はリナを罠にはめることを思いつく。

まず、リナの背後でカーテンに隠れてキャシーが代わりに歌い、リナには歌っているフリをさせる。そしてキャシーの歌声で「雨に唄えば」が披露されると、ドンたちはカーテンを開き、キャシーが吹き替えていることを観客に見せてしまう。こうしてキャシーはスターの座を手に入れ、ドンとキャシーは結ばれる。

エピソード

●「トップ・ハット」「バンド・ワゴン」「巴里のアメリカ人」などと並ぶミュージカル映画の傑作として知られる。

サイレント映画からトーキー映画に移る時代を描いたコメディあふれるバックステージ(舞台裏)・ミュージカル。ハリウッドを代表する名作のひとつであり、今なお、色あせることなく輝きを放っている。

特にジーン・ケリーが土砂降りの雨の中で、主題歌を歌いながらタップダンスを踊る場面は、映画史に残る名シーン。このシーンが 1 テイクで撮影されたという都市伝説があるが、真実ではなく、雨を降らした中のミュージカルシーン撮影が連日続いたため、彼は高熱を出していた。

●それほどの名作なのに、オスカーは取れずじまい。前年の 1951 年、ジーン・ケリーが主演を務めたミュージカル映画「巴里のアメリカ人」が公開され、アカデミー賞 6 部門受賞するなど高い評価を得た。「雨に唄えば」は、それから3週間後に公開されたため、「巴里のアメリカ人」の評判の前に影の薄い存在になってしまった。

●他の映画の中でタイトルソングの引用: スタンリー・キューブリックの傑作『時計じかけのオレンジ』の中で、マルコム・マクダウェル演じるアレックスが女性をレイプする時にこの「雨に唄えば」を歌う。

●映画開始から 1:22:03 の時点、ジーン・ケリーとシド・チャリッシのダンスシーンに不自然な編集箇所がある。ダンスが過激だったショットが検閲にかかり、カットされた映像

があると言われている。

●ジーン・ケリーの躍動感とパフォーマンスに圧倒される

共演のドナルド・オーコナーも、二人でドサ周りをやっていた時のパフォーマンスや、楽屋でのダンスシーンなどはジーン・ケリーをしのぐような身体能力を発揮している。

だが、あまりの撮影の過酷さに、オーコナーは一日にタバコを4箱も吸っていた。また、映画の中では対等の仲間である二人も、実はオーコナーはミュージカルの大御所ジーン・ケリーとは初の共演で、彼に怒られないか、緊張しながら毎日の撮影に臨んだ。

×現代のパフォーマーは自分の肉体美を披露するように、ナルシスト丸出しの衣装を身にまとい登場。

○この時代の役者はきちんと衣装に身を包み、実にエレガントに自分が映画スターだという自己主張を決して忘れていない一方、自分が楽しむというのはこの次にして、観客を楽しませるといふエンターテインメントに徹底している。

○映画人としていながらも映画を撮る現場を舞台に置き、観る側からの客観的な目で捉え、どう楽しんでもらうかということに重きを置いた、ミュージカルのエッセンスがこの映画には詰まっている。

○ジーン・ケリー、ドナルド・オーコナーの両者は、さわやかな笑顔で嫌みがない。自信に裏付けられた余裕というものにあふれ、立ち振る舞いが実に“粋”。

○長いハリウッドの歴史の中で、ダンスのうまさだけでなく、表現力や演技力も含めた総合的なミュージカル俳優として、両雄ジーン・ケリーとフレッド・アステアをしのぐ者はない。この映画で、あれだけのダンスと歌を披露しながら、息も切らせず、汗一つかかず、衣装の乱れもなく、終始笑顔で余裕の演技を見せるエンターテインメントの妙。

ただし彼は、シド・チャリッシよりも身長が低い事実を隠すため、綿密に計算してダンスシーン撮影に臨み、二人そろってピンと背筋を伸ばすことは極力避け、横に並ぶ場面ではどちらか一方が屈むように心がけていた。

●デビー・レノルズ (Debbie Reynolds)： 外国人名の発音をよく知らない日本の配給元の“ローマ字式”表記で、「レイノルズ」で売り出したが、正しくは「レノルズ」。(ちなみに、ドナルド・オーコナー Donald O'Conner の名字も最初はnが2つなので、「オコナー」。こんな名前と呼ばれたら、いくら「怒んなー」と言われてもね。さすがにやがて「オコーナー」に変わったが、正しい発音と原音表記は「オーコナー」。)

彼女はダンスを習った経験がなかったため、本作のダンスシーンは相当苦勞した。のちに彼女は「人生で最もつらかった出来事は、出産と『雨に唄えば』だった」と語った。一例として、“グッド・モーニング”のミュージカルシーン撮影は一糸乱れぬダンスが必要とされ、このシーンのラストショットだけで14時間、40テイクも撮られていた。撮影後、デビー・レノルズの足は血まみれだった。

あるシーンで泣く演技を要求された時は、目を玉ねぎでこすって涙を流していた。

撮影当時19歳だった彼女は、通勤渋滞を避けるため毎朝4時に起床、3本のバスを乗り継いで、両親と共に現場に通っていた。

●シド・チャリッシ (Cyd Charisse)： 彼女も、初めのローマ字式表記ミスで、「チャリシー」で知られてしまった。彼女の出番は“ブロードウェイ・メロディー”のバレエシークエンスだけ。元々この場面はデビー・レノルズが演じる予定だったが、ダンス経験の乏しい彼女にはハードルが高かったため、プロのバレエダンサーである彼女が抜擢され、これがデビュー作で、その後「バンド・ワゴン」「ブリガドーン」「いつも上天気」「絹の靴下」など、1950年代のミュージカル映画の代表スターとなった。

この映画ではギャングの恋人役なので、タバコを吸う設定にしたが、彼女は吸ったことがなかったため、何度もNGを出して苦勞した。

●元々はアーサー・フリード (作詞) とナシオ・ハープ・ブラウン (作曲) のコンビの過去のヒット曲を集めたミュージカルとして企画された。よって楽曲のほとんどはこの映画のために書かれたものではなく、特にタイトルナンバーはこの映画の前にも後にもたびたび

MGM の映画で使われ、ジュディー・ガーランドなど多くのスターたちが歌っている。そのため、脚本家たちは曲に合わせたプロットを考えるのに苦労した。その一人、アドルフ・グリーンは、トーキー फिल्मの台頭によってキャリアを終えることになったサイレント映画のスターから家を購入。その実際の出来事が彼にインスピレーションを与えた。

ドナルド・オーコナーの歌う「メイク・エム・ラフ」は新曲だが、これは、撮影開始寸前に監督ジーン・ケリー&スタンリー・ドーネンが彼のソロ曲がないことに気づき、音楽を担当したフリードとブラウンに楽曲を早急に用意するように依頼したもので、実はコール・ポーターの「ビー・ア・クラウン」のパロディー曲。

見どころ

① 人生に起こる一大転換期には、迷わず過去を捨てよ：サイレントからトーキーに変わった時、リナのように悪声で栄光の座を失った俳優たちがいた。日本では弁士が消えた。のちにラジオからテレビが登場した時には、容貌がイマイチの声優には職を失うピンチだった。

*私(小川)がワーナーを辞めた時、映倫審査委員へのチャンスがあり、受け入れれば、あと数年は好きな映画の世界にいられたが、祈って断った。⇒より広く主に仕える道が開けた。

* (ルカ 9:59-62) 「イエスは別のの人に、こう言われた。「わたしについて来なさい。」しかしその人は言った。「まず行って、私の父を葬ることを許してください。」すると彼に言われた。「死人たちに彼らの中の死人たちを葬らせなさい。あなたは出て行って、神の国を言い広めなさい。」別の人はこう言った。「主よ。あなたに従います。ただその前に、家の者にいとまごいに帰らせてください。」するとイエスは彼に言われた。「だれでも、手を鋤につけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくありません。」

→過去を振り返らず、新しい未来を目指す。過去の栄光、栄華、利益、恵みにしがみ付

く人は、結局全てを失う。“心機一転”、跡は振り返らず、神の備えられた新しい道を行こう。

② 隠されているもので、現れないものはない:

* (ルカ 8:17) 「隠れているもので、あらわにならぬものではなく、秘密にされているもので、知られず、また現われないものはありません。」

*リナは、吹替によって、自分の致命的な悪声を隠そうとしたが、ドンアイデアで、観衆の前にバレてしまう。悪しきことは、どんなに人々の前に取り繕い、隠しおおせたと思っても、必ず、どこかで、あらわになる。悪事もそう。なぜなら、神には全てがお見通しだから。「神は見ている。」(≠「家政婦は見た」)

③ 状況が悪いときは、視点を換えよ=聖なるパラダイム・シフト:

「困難な時期をすばらしい経験に変えることが人生での大切な技術かもしれない。雨を嫌うか、雨の中で踊るか、私たちは選択することができる。」

(経営学者ジョン・マルケス)

*人生に“雨”は避けられない。時には大雨か、嵐かも。その雨の中を、身を縮め、肩を下ろして歩くか、上を見上げ、歌いながら(賛美しながら)、スキップを踏んで歩くかは私たちの選択一つ。「雨に唄えば…心は晴れる!」ハレルヤ!

人生に夢を与えるミュージカルの傑作、「雨に唄えば」。懐かしかったですネ。楽しかったですネ。では皆さん、またお会いしましょう。ハレルヤ、ハレルヤ、ハレルヤ!